

張鑑「文徵明畫平倭圖記」の基礎的考証および訳注

——中国国家博物館所蔵『抗倭図巻』に見る胡宗憲と徐海?——

山 崎 岳

史料編纂所が所蔵する『倭寇図巻』が戦前から国内外に広く知られていたのに対して、中国国家博物館の『抗倭図巻』が一般に認知されるようになったのはそう古いことではない。¹⁾日本にこの図巻が初めて紹介されたのは、二〇〇七年に浙江工商大学日本文化研究所の王勇氏が来日講演をされた際であったとされる。この図巻の「発見」によって、これまで事実上天下の孤本とみなされてきた『倭寇図巻』を比較対照する可能性が生じ、その系譜関係がにわかに注目を集めることとなった。

さらに昨年、『抗倭図巻』の由来を探る重要な手がかりが、台湾・清華大学の馬雅貞氏によって見いだされた。それは清代中期の文人・張鑑の文集『冬青館集』巻四に収められた「文徵明画平倭図記」（以下「平倭図記」と略称）と題される一文である。馬氏は、明代の官僚が、当時頻発した辺境紛争に対する自己の勲功を顕彰するために描かせた「戦勲図」という概念を提唱され、その事例検証の過程で、この「平倭図記」に記述される人物描写が、現在北京国家博物館に所蔵される『抗倭図巻』の内容とびたりと一致することに気付かれたのである。²⁾美術史研究上における「戦勲図」概念の意義もさることながら、その副産物ともいえる「平倭図記」の発見は『倭寇図巻』および『抗倭図巻』の画像研究についても大きな進展をもたらしつつある。本稿は、こうした研究状況を受けつつ、「平倭図記」と『抗倭図巻』、そしてそこに描かれた題材との関係を、「平倭図記」の著された清代中期、そして「倭寇」が江南を襲った明代嘉靖年間の時代状況に立ち返って、もう一度とらえなおすことを

目的とする。なお「平倭図記」の全文ならびに訳注は後掲する。

「平倭図記」の著者・張鑑は、清代中期の浙江省烏程県出身の文人で、当時はそれなりに学者として名を知られた人物であった。³⁾官途の上では貢生にして県学の教諭という閑職に甘んじたが、高位の文官で時の学界の中心人物の一人でもあった阮元の門下でその文教事業の一翼をな⁴⁾い、後には内閣大学士の英和といった高官の知恵袋としても重宝され、八十余歳にして世を去るまで自身も多くの著作を遺している。

さて、この「平倭図記」執筆のきっかけは、嘉慶一〇年（一八〇五）七月ごろ、阮元が所蔵する一幅の画巻について、張鑑が考証を求められたことにある。⁵⁾問題の作品はこの時点で「文徵明画」と題されていたものの、文徵明の書画に門弟による贋作が多かったことは『明史』にまで記される事実で、この絵巻が本人の作であるとは阮元自身も考えていなかった。ただ、張鑑は「文徵明画」の枕詞にはあえて触れることなく、画幅上に附された題跋をもとにこれを嘉靖三五年（一五五六）八月、時の浙直総督・胡宗憲のもとでもたらされた「乍浦・梁荘の勝利」を描いたものと推定し、そこに描かれる文武諸官の詳細な人物比定を試みたのである。⁷⁾

その詳細については馬氏の論文にすでに触れられており、また後掲訳注と『抗倭図巻』とを対照していただければよいので、ここでは省略する。すでに須田牧子氏が述べられたように、⁸⁾国博本『抗倭図巻』は清代の張鑑が見た阮氏本『胡梅林平倭図巻』（以下『平倭図巻』）そのもので

はない。張鑑の記述をみる限り、そこで言及されるモチーフに関しては、細部に至るまで極めて正確な模写が行われたと考えられるが、それでも両者の間には若干の相違が読みとれる。『平倭図巻』と『抗倭図巻』は、どちらかが他方を直接あるいは間接に模写したものか、あるいは原本を同じくする模写という関係にある。張鑑の記述によれば、阮氏本は「靖海奇功」と題され、また画の内容に関わる紀事一篇が附されていた。⁹⁾ これらはいずれも、おそらく落款に基づいてか、能筆で知られた明代の文人・張寰の手になるものとされている。もしこれが本当に張寰の直筆になるものだと仮定すれば、この画幅の成立年月日は、嘉靖三十五年八月以降、同四〇年正月以前という範囲に限定することができる。¹⁰⁾ 胡宗憲が下獄し死去したのは嘉靖四四年のことで、この期間ならばその名声にもまだ傷はついていないはずである。¹¹⁾

もちろん、明代後期の社会背景を鑑みれば、これら題跋の全てをふくめて贋作である可能性も排除できない。¹²⁾ したがって、この図の原画が当初から「乍浦・沈荘の勝利」を描くものとして作成されたものであると断定することはできないし、制作年月日もこれよりさらに下ることもありえない話ではない。現時点ではほゆるぎない事実と見なせるのは、現存する『抗倭図巻』と非常に近い関係にあると思われる阮氏本『平倭図巻』は、嘉慶一〇年七月以前、阮元がこれを入手した時点において、張鑑が述べるような状態で存在していた、というただ一点である。ただ、さらに一歩進んで言うならば、その時点ですでに附せられていた題跋によつて、それは胡宗憲の乍浦ならびに沈家荘における戦勝を記念するものとは必然的に性格づけられるべく伝世していたのである。

では、張鑑が推定するように、この図が胡宗憲によるそれらの戦功を記念するものだとすれば、少なくともそのような推定を促すだけの条件が整っていたとすれば、この時の戦役が胡宗憲の勝利を顕彰するものと

して特に記憶されるのはいったいなぜなのか。「倭寇」に対する最初の大勝利と記録される王江涇の戦いや、「倭寇」の黒幕とみなされた王直の投降など、『抗倭図巻』に対するこれまでの研究が関連を示唆してきた事件に比べて、この戦役が「戦勲図」として絵画化されたことに何か特別な意味はあるのか。

それは、他ならぬ江南の「倭寇」の終息である。嘉靖三二年正月以来三年半の間、「倭寇」は長江河口部の兩岸各地を次々と襲い、明朝の文化的・経済的な中心地であった江南デルタを大混乱に陥れた。この時の「倭寇」は、三沙・柘林・川沙窪・陶宅、そして乍浦など江南デルタ辺縁の中小の海港・市鎮を占拠し、戦局に随って転々と拠点を移しながらも、毎年日本から来航する「新倭」によつて戦力を補充しつつ蘇州や杭州などの大都市をも襲い、官軍と一進一退の形勢を維持し続けた。¹⁴⁾ 北京から遠く離れた一地方の動乱とはいえ、ことは江南という明朝にとつて経済的な心臓部の問題である。また、これを放置すれば、長江以南を支配するための第二の首都・南京の安全も保証しかねる。こうした危機的状況のもと、明朝当局は先年に廃止した浙江巡撫を再設して同省の行政一元化を図り、さらに周辺各省の軍政を一括して統べる総督軍務の職を設けるなどの対策をとることで事態の收拾をはかった。

同時代人の観察をまとめると、明代嘉靖年間に「倭賊」と呼ばれた反政府勢力は、おおむね中国の海賊的武装商人が指導層を形成し、これに雇われた、あるいは協力関係にあった日本人が戦闘要員として配下の一翼を担うという構成であった。¹⁵⁾ もちろん「倭賊」とは一枚岩の集団ではなく、中小の集団が利害関係に随つて離合集散を繰り返すゆるやかな連合である。また反政府勢力とはいっても官憲の側から一方的に反政府的とみなされて滅ぼされた集団も含んでおり、事態は日本人を巻き込みながらも、江南デルタにおける当局と民間諸集団との内戦という性格を強

く持っていた。⁽¹⁶⁾「倭寇」とは、中国人か日本人かという二者択一では片付かない、複合的な要因、および主体が重なり合ったところに起こった現象であった。

記録にみえる中国人指導者たちの出身地は南直隸の徽州、浙江の寧波、福建の漳州・泉州、そして広東のおそらくは潮州などだが、局面によってはこれに浙江の漁船や江南の塩徒、さらに城外農村部の住民がその党与に加わった。⁽¹⁷⁾紛争地帯に生きる民衆の常として、彼らは戦況の優劣劣敗をみてまたすぐに官軍の側に立ちもどったから、「倭賊」の勢力には著しい消長があったが、すでにその道で名が通ってしまったお尋ね者は、たとえひとたび帰順を願い出て、身命を張って官軍のために貢献したところで、結局は刑場か戦陣で最期を迎えることになる。⁽¹⁸⁾

この江南デルタの一角を占拠した「倭賊」の中で、日本人については、それほど詳しい背景がわかるわけではない。ただし、嘉靖三五年の時点で官憲から江南の「倭賊」の首領と目されていた徐海、そしてその傘下でありながら一定の独立性を保持した陳東・葉明らは、とりわけ薩摩や大隅など南九州の日本人と関係が深かったことが知られている。⁽¹⁹⁾徐海はもともと杭州の虎跑山の僧であったが、叔父の徐銓の借金のかたとして大隅に送られ、徐銓が数万両の負債を遺して死んだので、これを贖うために掠奪に携わるようになったとされる。⁽²⁰⁾王直と鉄砲伝来の文脈で知られる種子島は、徐海が嘉靖三一年・三三年・三五年の三度にわたってこの島の住民を大規模に「倭寇」へと動員したため、島の人口が激減したとの記述もある。⁽²¹⁾僧形の徐海は明山和尚との通り名で日本人の尊敬を集めていたが、集団内部で徐海に次ぐ地位にあった陳東は、「薩摩王の弟の故帳下の書記の酋」と呼ばれ、⁽²²⁾日本人たちの間ではいっそう大きな威信を布いていた。また、徐海麾下の日本人の将であった辛五郎という人物は大隅島主の弟と称していたし、⁽²⁴⁾このほかに徐海にゆかりのある日

本人として、種子島の助才門もしくは助五郎、薩摩の掃部、日向の彦太郎、和泉の細屋などの名が伝わっている。⁽²⁵⁾この時代の南九州の武力に恃んだ海外進出への気運は、半世紀後の琉球侵攻の前提となったもので、「倭寇」の「倭寇」たる所以であったともいえる。⁽²⁶⁾

なお、一般に「倭寇」とは海賊の一種だと説明されることが多いようだが、航行中の船を襲って積み荷を奪うといった典型的な海賊行為は「倭寇」の本領ではない。和船も含めて、「倭寇」側が乗用した中小の船隻は、海賊においては福建や広東の大型船に歯が立たず、明朝官軍の敵ではなかった。⁽²⁷⁾「倭賊」、とりわけその精鋭部隊であった日本人の集団が現地の官軍を圧倒しえたのはむしろ陸上においてであった。繰り返すことになるが、「倭寇」が明朝中央で大問題としてとりあげられたのは、いわゆる海賊行為のゆえではない。肥沃な農業地帯であり、先進的な手工業生産地であり、また騒人墨客の集う文芸の中心地でもあった江南地方を、半ば独立状態に置くかのように、「倭賊」集団が占拠したがためであった。こうした形勢を放置しておけば、第二の首都であり明朝の南方支配の中枢である南京が脅かされ、さらに南方から漕運を通じて運ばれる富に多くを依存していた明朝政権にとって、その存立の危機にもつながりかねなかったのである。

最終的にこの危機が打開されたのは、この凶の主人公と目される胡宗憲が嘉靖三五年二月、浙江・直隸総督軍務として両省の軍事司令権を一手に掌握してまもなくのことである。嘉靖三五年八月に乍浦ならびに沈家荘で行われた軍事作戦によって、江南デルタ本土における官軍と「倭賊」との間の戦闘はおおむね鎮静化した。それら「倭賊」の元締めとされた徐海の一派が相次いで逮捕・殺害される中で、江南の平和はふたたび明朝の統治下に回復されることになった。これは、「倭寇」と呼ばれる一連の動乱における一つの重要な転換点である。この翌年、舟山島に

駐留していた王直が官軍に投降するのに前後して、江南・浙江一帯における「倭寇」はほぼ完全に平定されることになる。これ以降、「倭寇」は一方で浙江南部から福建・広東などの東南沿海部の問題として尾を引き、さらに鬱屈した日本の対外感情は豊臣秀吉の征明の役という形で暴発することになるが、こと江南地方に関しては、明朝にとって体制を揺るがしかねない一大危機は当面のあいだ回避されたのである。

この間最高司令官の地位にあった胡宗憲の功績が顕彰され、称えられるのは至極当然のことのように思える。ところが、実際には胡宗憲は後世からそれほど高く評価される人物ではない。彼の司令下で將軍として活躍した俞大猷や戚繼光が、「抗倭英雄」として現在の中国でも国民的偉人とみなされているのに対して、胡宗憲という人物はそこまでの知名度を勝ちえてはいないだろう。万世の師表たる俞大猷や戚繼光が人格的な理想化を経た結果、古今歴朝千篇一律のつまらない人物像しか与えられていないのに対し、胡宗憲は利害にさとく、陰険で、権力欲にまみれたいかがわしさを漂わせた結果、かえって好事家の興味を引くような人間像が伝わっている。たとえば『明史』によれば、²⁸権謀術策を多用し、功名心が強い人物であったと伝えられ、時の権臣・嚴嵩・嚴世蕃父子と結び、毎年のように「金帛・子女・珍奇・淫巧」を上納していたという。また、人材を用いるのに巧みで、幕下に食客を養ってその力を引きだすことに長けていたが、こうした活動は公金の流用と現地での苛斂誅求でまかなわれたと批判され、後世からもしばしばその悪政の一端に数えられている。²⁹官界には政敵も多く、ついには嚴嵩父子失脚の際に王直との関係を蒸し返されて獄中で死を迎えることになる。

胡宗憲が、後世から後ろ指を指されるような汚いところを性格的にもついていた、あるいはそういった人間的な汚点が人目にさらされても平然と我が道を行くことができる人物であったことは、おそらく確かなの

ではないかと筆者も思う。ただし、それよりはるかに重要なのは、そのような人物にしてはじめて、嘉靖時代の「倭寇」という乱世における難局をよく乗りこえることができた、という一面の真実ではないか。

それは戦役の進行過程における徐海とのやりとりを見ても感じられるところであろう。一連の顛末は茅坤の『紀剽徐海本末』に詳細に語られている。胡宗憲は、官軍への帰順という選択に心引かれる徐海と、徹底抗戦をこころざす陳東や麻葉とのあいだの亀裂を利用して、彼らの同士討ちを誘う。言うとおりにすれば命は助け官爵を与えてやるとの胡宗憲の言葉を信じ、徐海は陳東と麻葉を捕えて官軍につき出し、その一党を肅清してゆく。人質として送られた弟の徐洪も胡宗憲は快く、また丁重に迎え入れてその心服を勝ち取り、投降と称しながら武装したまま面会にきた徐海に対してはわざわざ堂から下り、その頭をさすって帰順の意をねぎらってやる胡宗憲の姿は、さすがに鶏鳴狗盗の有象無象を存分に使いこなしてきた大親分の度量を示すものであろう。ただし、結局のところ胡宗憲は、自分に一縷の望みをつなぎ、官軍のもとで新たな生き方を模索しようとする徐海との約束など何ら意に介することなく、陳東と葉明の残党を焚きつけて徐海を襲わせ、最終的には外地の傭兵部隊を率いてこれらを左右なくもろとも包囲殲滅するのである。

もちろん胡宗憲の背信は、徐海の助命に対して趙文華や阮鶚など同僚諸官が強硬に反対したことが少なからず影響したものであろう。また、それとは別の次元で現地士大夫の輿論の圧力も感じていたに違いない。「倭賊」の側についていた人々はいさ知らず、数年のあいだ城壁にたてこもって戦々恐々としてきた江南の民衆にとっても、徐海は「倭寇」の災禍をもたらした張本人であった。その首には前年八月の時点で三百両の賞金がかけられており、³⁰誰知らぬものない極悪非道の逆賊であった。当時の世にあつて圧倒的多数を占めた常識的見解にあえて盾をついて、男の

約東だからなどとこれをかばうようなお人好しでは浙直二省の大権をあずかる総督軍務はつとまらない。破滅を被るのは徐海か、自分か。答えは自明であろう。とはいえ、胡宗憲が徐海に助命をもちかけた時点で、その末路は当然予想されていたはずである。また、麻葉や陳東に手紙を書かせる際にも、きつと同様の条件をちらつかせたに違いない。反故になることを分かっているながら、大人壮士の度量を見せつけつつできない約束をするのだから、いかにも老獪、あるいは陰険とさえいわれても仕方あるまい。この時、実行に値する何の良策をも提示しえなかつた趙文華や阮鶚の無難な態度の方が、多くの人々の目にはかえって毅然とした清官の風と映つたのではないか。⁽³¹⁾『紀剿徐海本末』は当時胡宗憲の幕下にあつた茅坤がその功績を顕彰するために著したもので、明清時代の士大夫であれば、おそらく誰でも知るところであつた。茅坤としては胡宗憲の智謀を顕彰するつもりだつたに違いないが、結果的にその狡猾さがかえって強く後世に印象づけることになつたのである。

ただ、すでに述べたように、「倭寇」とは江南における中国国内の内戦という一面をもっている。「倭賊」の側には多くの江南の住民が付き従つており、官軍と正面から衝突すれば、あまたの人命が失われたであろう。胡宗憲のはかりごとによつて、官軍も民間人も犠牲を最小限度に押さえたまま、「倭賊」の内部抗争を惹起してその組織の自壊を招くことに成功したのである。結局のところ、胡宗憲のような策略家にして、はじめこの動乱を治めることができたのだともいえるかもしれない。時代が胡宗憲という指導者を必要とした所以である。

このほかにも嚴氏一派との人脈や王直とのやりとり、『籌海圖編』の編纂をめぐる鄭若曾との関係など、この人について掘りさげるべき論点はいくつもあるが、ここでは触れずにおこう。「平倭図記」の撰者張鑑は胡宗憲を尊敬に値する人物とは考えていなかったようで、「倭寇」に

決定的な打撃を与えたのは前任の張経司令下に戦われた王江涇の戦役であつて、胡宗憲の功績などは、その幕下の文人が実際以上に誇大に宣伝したものに過ぎないという。これは必ずしも正当な評価とはいえないが、いずれにせよ、張鑑もこの『平倭図巻』を、胡宗憲の戦功を誇張して記念する「戦勲図」の枠組みで読みとつていたことになる。清貧を本懐とする文人士大夫からみればさしずめ唾棄すべきものであつたに違いないが、このころ阮元のもとで下請けに甘んじていた張鑑には、画工の気持ちも分からないではなかつただろう。胡宗憲、文徵明、そして阮元。事業と人脈の頂点に立ち、これを代表し、そして後世に名を残す人々である。不惑の歳にさしかかつていた張鑑は、我が身もまた乾嘉の盛世にめぐりあいながら、時代の寵児・阮元の名の陰にこのまま埋もれていくであろうことを予感していたのかも知れない。そして師の行跡を後世に伝えることに学徒としてのおのれの使命を見いだしていたところもあるのではないか。張鑑がこの図に「文徵明画」の帽子をかぶせたままにしておいたのも、へたな道理を立ててこれを取り去つてしまえば、これに目をとめる者が誰もいなくなつてしまうことを恐れたのであろう。

幸いにも今日我々は「文徵明画」とは全く別の文脈でこの図に注目している。そして美術市場とは縁のないところでこれを眺める筆者は、様々な批判にさらされながらその功績を喧伝することで朝野の圧力に対抗せねばならなかつた胡宗憲、他人の名を拝借してまで自身の作品を世に出そうとした無名の画工、それと知りながらあえて文徵明の親筆に見立ててこれを評した張鑑らのいじましい営みに、かえつて名家の真蹟をみる以上の興趣をおぼえる。「倭寇」と絵画史という一見何の接点もなさそうな二つの題材は、明末の江南社会という時代背景の中に置いてみると案外近いところに位置づけられるのである。⁽³²⁾

最後になつたが、この図を胡宗憲の「乍浦ならびに沈家荘の勝利」を

記念するものと考えられるには、いくつかの疑問点がある。赤外線照射を用いた最新の調査結果によれば、『抗倭図巻』には事件の翌年にあたる「弘治三年」の年号が記されていること、茅坤の記述に詳しい沈家荘の状況が画面上に反映されていないこと、胡宗憲の幕下にいれば当然見知っていたであろう仏郎機砲の描写に明らかな誤解が見られることなど複数の点が挙げられるが、もつとも不可解なのは、この図中に賊軍の大將である徐海の像が見えないことである。倭人風に髪を剃ったふんどし姿の三人の捕虜を徐洪・陳東・麻葉とした点、船上の官人と縛り上げられた男たちを都指揮使の盧鐘と倭將の辛五郎らであるととした点は張鑑の炯眼だが、ついに肝心の徐海の姿は見いだせなかったのである。

『倭變事略』に載せられる胡宗憲の戦勝報告によれば、八月二六日の辰の刻、徐海が数十名の倭賊を率い、刀を振るって指揮をとったが、永順土兵の把総・汪浩と田有年によって陣中で首を討たれたとある。一方、『倭變事略』本文は、徐海は二五日に敵対する党派によって攻め殺されたと記し、状況は一致しない。茅坤の『紀剿徐海本末』は、徐海は疑いを懐いた陳東の一派に襲われて刀傷を受け、翌日官軍が徐海の居館を攻めた際に河に投じて死んだかのような記述がなされており、永順・保靖の兵が徐海の愛妾の手引きで河をさらい、死体から首を斬って持ち帰ったことになっている。実録では、門を閉ざして火中に投じ、あい枕して討ち死にしたとされるが、他の所伝と交わらないためあてにならない。おそらく徐海は官軍の総攻撃に一日先だつて、もと陳東の配下の者どもの手にかかつてすでに殺されていたのではないか。だからこそ、死体が捨てられたどぶ川などは徐海の愛妾たちしか知らなかったのではないか。そして、そこで斬りとられた首の功名が、討ち入りの際に一番乗りを果たした永順土兵の一隊に与えられたのではないか。

ともあれ、徐海がいかなる最期を迎えたにせよ、「戦勲」を礼賛すべ

きこの図の中に徐海の首すらも見えないのはなぜか。『平倭図巻』には描かれていたものを張鑑が見落としただけなのか。それとも、実際は徐海の死体は結局みつからず、原作者がその事実を正確に図に反映させたためなのか。あるいは、この図が「乍浦ならびに沈家荘の役」を描いたものだという前提がそもそも間違っているのか。答えはいまもって徐海の死の真相とともに闇の中である。

〔注〕

- (1) 中国で『抗倭図巻』が一般の目に触れるようになったのは、孫健「明代倭患与『抗倭図巻』」『中国国家博物館藏文物研究叢書・絵画卷（歴史画）』（上海古籍出版社、二〇〇六）以降のこととされる。『倭寇図巻』および『抗倭図巻』の研究史については、須田牧子『倭寇図巻』再考』（東京大学史料編纂所紀要）二二、二〇二二を参照。
- (2) 馬雅真「戦動與官蹟・明代戰爭相關圖像與官員視覚文化」（『明代研究』一七、二〇一一）。邦訳は植松瑞希訳「戦勲と官蹟―明代の戦争図像と官員の視覚文化―」（『東京大学史料編纂所紀要』二三号、二〇一一）。
- (3) 『清史稿』卷四八六に立伝されるほか、『疇人傳』卷三、『兩浙輶軒錄』卷二二などに伝がある。
- (4) 張鑑が阮元の門生の地位にあったのは、嘉慶六年、彼が数え歳三三三の時に浙江巡撫であった阮元に抜擢され、西湖のほとりに開設された詒経精舎という書院で講師役を務めた期間である。張鑑はその三年後、嘉慶九年の科挙に副榜（補欠）で合格して同省武義県の教諭に任ぜられており、また齡四〇にして科挙の道をあきらめ、阮元のもとを去ったとする所伝もあるが、張鑑は阮元死後その年譜を著しており、両者の師弟関係は生涯にわたって続いた。
- (5) 張鑑『冬青館集』乙集二／文二／記／「明錦衣千戸謝庭循書杏園雅集圖記」に、「嘉慶乙丑七月、中丞師既以梅林平倭圖命考。」との記述がある。
- (6) 『明史』卷二八七／「文徵明傳」に「文筆徧天下、門下士贗作者頗多、

- 徵明亦不禁。」とある。
- (7) 張鑑は「乍浦・梁莊の勝利」とするが、『紀勳徐海本末』によれば、このときの主たる戦場は乍浦と沈家荘であり、本来「乍浦・沈莊（沈家荘）の勝利」とすべきである。『明実録』、および『明史』の誤記を張鑑が踏襲したものの。
- (8) 須田牧子「『倭寇図巻』研究の現在」（『東京大学史料編纂所画像史料解析センター通信』五九、二〇一）。
- (9) 題字に基づくなら、本稿でいう『平倭図巻』は、本来『靖海奇功図』と呼ぶべきかも知れない。また、紀事には同時代に刑部尚書まで務めた顧応祥の『海寇篇』という詩が附されていたという。『明詩綜』卷三三に顧応祥の作として「海寇」と題する詩が収められている。ただ張鑑の本文にいう「去年嘉興敗」という句は含まれておらず、年月への言及もない。このほかにも「海寇」を掲げる詩があったものと推測される。顧応祥には『崇雅堂詩集』一四巻があるが、筆者は未確認。
- (10) 『震川先生集』卷二三／「通政使同右參議張公墓表」によれば、張實は嘉靖四〇年正月に数え年七六で世を去っている。
- (11) 『明世宗實錄』卷五五／嘉靖四四年一〇月丙戌。ちなみに前掲注(8) 須田二〇一二によれば、張實はどこからか手に入れた沈周の画に自作の詩を附して胡宗憲に贈るような交友関係にあった。
- (12) 近年の中国の骨董熱、および骨董市場における模造品の流行から、明清書画を対象とする鑑定マニュアルの類は数多い。学術的な専論としては、さしあたり楊臣彬「談明代書画作偽」（『文物』四一一、一九九〇）を参照。明代の文化・社会状況全般を概観するには、中砂明德『江南—中國文雅の源流—』（講談社選書メチエ、二〇〇二）が有用。
- (13) 前掲注(1) 孫健二〇〇六、および朱敏「解説明人『抗倭図巻』…兼談与『倭寇図巻』的關係」（『中国国家博物館館刊』九一、二〇一）はこれを王江涇の戦いと推測する。ただし、その重要な論拠である「弘治一年」の年号は中国にはもちろん日本にも用例がなく、にわかには首肯できない。ちなみに、図上の問題の箇所には剥落を貼り直した形跡があるが、復元が原状に忠実に行われたものとは認めがたい。前掲注(1) 須田二〇一二は、赤外線照射によって現れた「弘治三年」「弘治四(?)年」の年号が王直の投降の年にあたることを指摘するが、これを特定の戦役や場面に帰すことはあえて避け、「嘉靖大倭寇」の象徴的な年号として用いられたものと理解する。
- (14) こうした顛末を最も詳細に追う研究として、鄭樑生『明史日本傳正補』（文史哲出版社、一九八一）、同『明・日関係史の研究』（雄山閣、一九八五）がある。しかし、日明関係と「倭寇」を無前提に混同する傾向がある点には注意を要する。
- (15) 嘉靖年間の「倭寇」の一般的説明については、石原道博「倭寇」（吉川弘文館、一九六四）、秀城哲「二六世紀「倭寇」を構成する人間集団に関する考察—倭と日本人の問題を中心に—」（山田賢編『中華世界と流動する「民族」』千葉大学大学院社会文化科学研究科、二〇〇三）、同「二六世紀「嘉靖大倭寇」を構成する諸勢力について」（『千葉大学社会文化科学研究』八、二〇〇四）などを参照。啓蒙書だが『倭寇図巻』にも触れたものに、田中健夫「倭寇—海の歴史—」（講談社学術文庫、二〇一二）がある。「倭寇」研究史上、村井章介・高橋公明らの論考は重要な位置を占めるが、明代中国に関わる専論ではないため、ここでは言及しない。
- (16) 海禁政策に反対する民間人の闘争という視点を最も徹底させた研究としては、林仁川「明末清初私人海上貿易」（華東師範大学出版社、一九八七）がある。また、「倭寇」側についた民間人のスパイ活動に関しては、川越泰博「倭寇の都市襲撃と姦細」（『アフロ・ユーラシア大陸の都市と宗教』中央大学出版部、二〇一〇）を参照。
- (17) 漁船や塩徒については、山崎岳「江海の賊から蘇松の寇へ—ある「嘉靖倭寇前史」によせて—」（『東方学報』八一、二〇〇七）、同「黄魚洄游在人間—從漁業漁民的視角重新審視舟山歷史—」（『舟山普陀与海域文化交流』浙江大学出版社、二〇〇九）を参照。
- (18) 明代中国東南沿海部の無頼社会と治安秩序の関係を扱う専論として、前掲注(17) 山崎岳二〇〇七、同「舶主王直功罪考（前編）—『海寇議』とその周邊—」（『東方学報』八五、二〇一〇）がある。
- (19) 徐海とその集団の活動に関する専論に、李猷璋「嘉靖海寇徐海行蹟考」

- (20) 『嘉靖寧波府志』卷二二／海防書。
- (21) 『日本一鑑・窮河話海』卷四／「風土」。
- (22) 『日本一鑑・窮河話海』卷六／「流通」。
- (23) 『紀勳徐海本末』に「陳東者、薩摩王弟故帳下書記箇、海故未敢縛也。」とある。「紀勳徐海本末」は、『籌海圖編』卷九、「茅鹿門文集」卷三〇などに収録される。また、『金聲玉振集』の『海寇後編』も同内容。
- (24) 『皇明輔世編』卷六／「胡少保宗憲」。
- (25) 『日本一鑑・窮河話海』卷四／「風土」。また『籌海圖編』卷八下／「寇蹤分合始末圖譜」では、徐海・陳東・葉明が率いた人々の出身地は、薩摩・肥前・肥後・筑前・豊後・博多・対馬・紀伊・和泉・津州など、九州各地と近畿南部の地名が挙がっている。大隅は他の状況証拠からその介在がほぼ確実だが、ここにはみえない。「津州」は摂津を指す。村井章介氏の教示による。
- (26) この時代の南九州の活発な対外関係に関しては、藤田明良「中世後期の坊津と東アジアの海域交流」(『境界からみた内と外』下巻、岩田書院、二〇〇八)を参照。
- (27) 『籌海圖編』卷二上／禦海洋、同卷十三上／「兵船」／「福船」。
- (28) 『明史』卷二〇五／「胡宗憲傳」。胡宗憲の伝記として、唐順之の子・鶴徴の『皇明輔世編』卷六／「胡少保宗憲」が最も詳しい。また、胡宗憲の子・桂奇「胡公行實」があり、ほぼ同内容と思われるが、目下未検討。胡宗憲幕下の多彩な顔ぶれについては、辻原明穂「明代督撫幕府の構造と特色——嘉靖年間の胡宗憲幕府を手掛りとして——」(『史窓』六七、二〇一〇)、またそうした在野の人脈が官界に対してもちえた影響力については、城地孝「丹陽布衣邵芳考」(『長城と北京の朝政——明代内閣政治の展開と変容——』京都大学学術出版会、二〇一〇)を参照。

- (29) 『明史』卷二〇五／「胡宗憲傳」、および『明名臣言行錄』卷五九／「少保胡襄懋宗憲」の李樂の評など。
- (30) 『明世宗實錄』卷四二五／嘉靖三十四年八月乙亥。
- (31) たとえば、『倭變紀略』卷四／八月二日や、『國朝獻徵錄』卷六三／「石僉都御史函峰阮公鸚墓志銘」などからそうした傾向が窺える。
- (32) 明末の江南社会に「倭寇」と文人文化を同時に位置づける試みとして、前掲注(11)中砂二〇〇二が知られる。
- (33) 前掲注(1)須田二〇一二を参照。
- (34) 砲身の上下および前後が反転して描かれている。ちなみに題跋中の「海寇篇」の作者とされる顧応祥は、『籌海圖編』卷一三下／「佛郎機圖說」に引用されるほどの火器通であった。
- (35) 『倭變事略』卷四／附「胡總督奏捷疏」。
- (36) 『明世宗實錄』卷四三八／嘉靖三十五年八月辛亥。「海等窮迫、皆闔戸、投大中、相枕籍死。」とあるが、これは「投火中」の誤記であろう。時に強風が吹き、官軍が館に火をかけたという話が『紀勳徐海本末』に見えらる。

【原文】

張鑑「文徵明畫平倭圖記」⁽¹⁾
 明文徵明畫「胡梅林平倭圖卷」、乃揚州阮氏文選樓所藏。雲臺師云、
 「此卷筆蹟不類衡山、且此時衡山年已八十有七。其自署「門下文徵明」、
 或即兵部主事楊芷、倩衡山生徒所爲、以應梅林之索者乎。子其爲我考
 之。」
 鑑按、此卷高尺有咫、長二丈一尺。⁽⁸⁾ 卷首書「靖海奇功」四字、畫尾書
 「紀事」一篇、皆御史張寰所作。中有長興顧箬谿書「海寇篇」。⁽¹²⁾ 考詩及
 「紀事」所載年月、殆記丙辰乍浦・梁莊之捷也。⁽¹³⁾
 按「明史・世宗本紀」⁽¹⁴⁾「嘉靖三十五年七月辛巳、胡宗憲破倭於乍浦。」
 「八月辛亥、又襲破海賊徐海於梁莊。」而「日本傳」⁽¹⁶⁾所謂、「宗憲設計聞

之、海遂禽東・葉以降、盡殲其餘衆於乍浦。未幾復蹙海於梁莊、海亦授首、餘黨盡滅、江南・浙西諸寇略平。」此即其事、而當日文士誇張以爲大捷是也。

又按『宗憲傳』⁽¹⁹⁾、「海解桐鄉圍、復巢乍浦。宗憲令俞大猷潛焚其舟。海心怖以弟洪來質。宗憲因厚遇洪、諭海縛陳東・麻葉、許以世爵。海果縛葉以獻。宗憲解其縛、令以書致東圖海、而陰泄其書於海。海怒以計縛東來獻。帥其衆五百人去乍浦、別營梁莊、官軍焚乍浦巢、斬首三百餘級、焚溺死稱是。海遂刻日請降、宗憲慰諭之、海自擇沈莊、屯其衆。沈莊者東西各一以河爲塹、宗憲居海東莊、以西莊處東黨、令東致書其黨曰、「督府檄海夕禽若屬矣。」東黨懼、乘夜將攻海、海挾兩妾走間道、中稍。明日官軍圍之、海投水死。會盧鍾亦禽辛五郎至、遂俘洪・東・葉・辛、及海首獻京師。帝大悅、行告廟禮、加宗憲右都御史。」此圖之中所以爲梁・沈兩莊也。

今考圖中一人、貝胄組甲⁽²³⁾、豐頤而短鬚⁽²⁴⁾、按轡乘紫駟馬⁽²⁵⁾、一武士執大纛前導、稍次兩武士、一執終葵⁽²⁷⁾、一執鉞者、即總督胡宗憲也。按茅副使坤⁽²⁸⁾「紀勦徐海本末」⁽²⁹⁾、「明日官兵四合、牆立而進。保靖兵先當之、稍卻。河朔兵乘之、又卻。俄而胡公擐甲、厲聲叱永・保兵左右列、大呼而入。海窘甚、遂沈河而死。」所紀擐甲事與張納言記相合、是以知爲續谿也。

續谿之右、一官朱衣紗帽、頤鬚上微銳、彎眉蠶目、乘青驄並驅而前者、其尚書趙文華乎。按『文華傳』⁽³⁶⁾、「帝以文華爲賢、命鑄督察軍務關防、即軍中賜之。自是出總督上。」又『宗憲傳』⁽³⁹⁾、「海既刻日請降、先期猝至、率酋長百餘、胄而入、文華等懼、欲勿許。」則當日文華固在軍中、且自文華既傾張經・李天寵、宗憲又其所薦代事之、惟恐不謹、並行而先焉、宜也。

又其後、高冠圓領、朱袍服繡、豐下而須⁽⁴²⁾、以其次論之、則巡撫阮鶚也。『浙江倭變紀』⁽⁴⁴⁾、「海先期而至、入見胡・趙・阮三公。」胡者梅林、趙者甬

江、則以次當爲鶚也。且『獻徵錄』⁽⁴⁵⁾載鶚、「桐鄉被圍之後、賊奔據沈莊、憑險自固。鶚曰、不滅海、尚留根蔓乎。」則滅海之時、鶚得在軍中也。

又其後、一官、方面左顧、年稍輕者、巡按趙孔昭也。『倭變紀』⁽⁴⁷⁾曰、「海入見胡・趙・阮三公及巡按趙公孔昭於平湖城中。出曰、鑒諸軍門之貌、吾禍終不免。」則趙又其次也。

其餘文臣四人、皆朱衣烏帽、或郎中郭仁⁽⁴⁹⁾、副使劉燾⁽⁵⁰⁾、徐汝⁽⁵¹⁾、參政汪柏⁽⁵²⁾、參議王詢⁽⁵³⁾、皆見於餘姚諸大圭⁽⁵⁴⁾『乍浦紀捷』⁽⁵⁵⁾、不盡可詳也。此圖中之文職可考者也。

其武臣可考者、一將面豐無須、胄而組甲、前擁二旗、旁豎大旗一、上畫虎而翼、在胡・趙二人後者、疑總兵徐珏⁽⁵⁶⁾。亦見於『乍浦紀捷』者也。

又一將、居前側身、乘紫駟馬、胄首朱甲、執長旗督戰、前五兵手弓矢彎注。又八兵執長鎗前驅轉鬪、則都指揮戴冲霄也。按『倭變紀』⁽⁵⁸⁾、「是時賊壁甚堅、諸將畏矢石、不敢近。胡公怒、命都指揮戴冲霄攻之、兵大進擣巢於半日之間、實冲霄之功。」則爲戴無疑也。

又一將右視、坐船中、前一卒執旗立、將以右手指船頭首級纍纍然者、疑遊擊尹秉衡等。按『宗憲傳』⁽⁵⁹⁾、「以海首獻京師。」而諸大圭⁽⁶⁰⁾「捷紀」稱「公先令副使劉燾引遊擊尹秉衡、夜伏乍浦城中。」或其人也。

尹之左、一船稍後、中坐一將、弁而朱袍、緩帶來獻俘者、通眉豐下、按膝凝視船頭、反接而囚者四、此總兵盧鐘也。按『宗憲傳』⁽⁶¹⁾、「會盧鐘亦禽辛五郎至。辛五郎者、大隅島主弟也。」則所俘於舟者、辛五郎也。

又二船橫陣於倭艇之中、十餘人與倭鏖戰、一船首置一佛郎機⁽⁶⁴⁾、一兵俯身然藥繩就放、後一將方面廣額、要縣弓箠、左執旗以右手指麾督戰、此總兵俞大猷也。『倭變紀』⁽⁶⁶⁾所謂、「公又別遣總兵俞大猷、伏飛艦海上、遮擊之溺且盡。」是也。一船稍先出、與此船並、後一將微髭怒目、執黃旗督戰、此或參將丁僅壁乍浦城以爲內援者、不盡可考也。

此圖中之武職可考者也。

其面縛步行、身纏微纆而俘者三人。曰徐洪、海之弟也。曰陳東、海之書記也。曰麻葉、海之黨也。又一小鹿頭船、船首兩人持篙。一椎髻小童立於篷背、而覘其後。其艇烏篷櫺窗、窗中一女子紅袖擁髻、注目外視、一女子青衫紅裳、相凭而立、不類民人逃竄者、疑妓女翠翹・綠姝也。按『紀勦本末』、「海皇急、令酋竊兩侍女出。」及死、「永・保兵俘兩侍女而前、問海何在。兩侍女者王姓、一名翠翹、一名綠姝、故歌伎也。兩侍女泣而指海所自沈河處、永・保兵遂蹈河、斬海首級以歸。」則此其人也。其餘兵士有河朔⁽⁷⁰⁾・有永保⁽⁷¹⁾・有保靖⁽⁷²⁾・有容美⁽⁷³⁾兵、故不一律也。

吁、畫之能事至此纖悉、與當日情事相合、非苟焉而已。昔唐時浙東劇盜屢起、而張伯儀⁽⁷⁴⁾之平袁晁⁽⁷⁵⁾、不若王式⁽⁷⁶⁾之平裘甫⁽⁷⁷⁾。胡三省注通鑑以為、此「蓋由唐中世、家有私史、王式儒家子、成功之後、紀事者不無張大。」今觀梅林所就、亦何獨不然。然王江湮⁽⁷⁸⁾之捷、實出張經⁽⁷⁹⁾、其功為文章所攘。『明史』及『武備志』可覆視。而箬谿詩直云「去年嘉興敗」⁽⁸⁰⁾、殆有微詞乎。是為記。

〔補注〕

(1) 張鑑、字は春冶、号は秋水。浙江烏程県の人。嘉慶六年の貢生。浙江武義県学教諭に任ぜられる。浙江巡撫阮元が西湖に詠経精舎を建てるとその門下に入り、その施政および文化事業に協力した。経学・史学・詩文の学のみならず、算術・音楽・音韻・文字・金石・地理・水利・海事など広く諸学に通じ、関連する著作を多くのこした。『清史稿』卷二七三に立伝されるほか、『疇人傳』卷三、『兩浙輶軒錄』卷二二などに伝記がある。齡四〇にして阮元のもとを去つたとされるが、張鑑は阮元の年譜を著しており、両者の関係は生涯にわたって続いたものと思われる。本文「文徵明画平倭圖記」は『冬青館集』甲集／卷四／文一の所収。

(2) 文徵明…(一四七〇—一五五九) 名は璧、徵明は字。後に字を徵仲と改める。号は衡山。明代中期の文人。蘇州府長洲県の人。官は翰林院待詔

を務めたが、短期間で致仕した。文を呉寛に、書を李応楨に、画を沈周に学び、いずれにおいても当代一流の名声を博した。特に画業においては、沈周・唐寅・仇英と並んで呉門四家の一人と評される。門人による贋作も多く、自身はこれを知っていたがえて戒めなかつたという。『明史』卷二八七に伝が立つほか、子の文嘉による「先君行略」(『甫田集』卷三六)、王世貞「弇州四部稿」卷八三「文先生伝」等の伝記がある。最新の年譜に周道振・張月尊『文徵明年譜』(上海百家出版社、一九九八年)がある。

(3) 胡梅林・胡宗憲(一五二一—一五六五)、字は汝貞、号は梅林。徽州府績溪県の人。嘉靖一七年の進士。同三〇年前後から東南沿海部で「倭寇」問題が深刻化すると、三三年に浙江巡按御史に任ぜられる。中央の権臣嚴嵩父子や督察軍務の趙文華のうしろだてを得て江南・浙江両省の総責任者である浙直總督軍務に昇格し、同地方の「倭寇」の鎮圧に決定的な役割を果たした。嚴嵩父子の失脚後、関係を問われて入獄し、獄中で死亡。万曆初年に名譽回復がなされ、襄懋と諡号される。『明史』卷二〇五に立伝されるほか、もっとも詳細な伝記として、子の胡桂奇による『胡公行実録』不分卷、および唐鶴徵『皇明輔世編』卷六がある。

(4) 揚州阮氏文選樓…後掲注(5) 阮元の蔵書樓。嘉慶一〇年、揚州府治の東南、阮元の自邸・家廟のある文選巷に建てられた。この場所にかつて隋の曹憲の邸宅があり、門人を集めて「文選」の講義を行ったという所伝にちなんで名付けられた。(阮元『學經室集』四集卷二「揚州隋文選樓銘」) 阮元の蔵書は骨董趣味に走らず、実用を旨として体系的に集められたことで知られる。その蔵書目録に『文選樓蔵書記』六卷がある。

(5) 雲臺師…阮元(一七六四—一八四九)、字は伯元、号は雲台、雷塘庵主、怡性老人など。諡は文達。揚州府儀徴県の人。乾隆五四年の進士。山東・浙江の巡撫、兩広・雲貴の総督等の職を歴任し、各地で書物の編纂・出版や書院の建設など、文教の振興に多大な貢献を果たした。自身高名な学者であり、著述は経学・史学・詞章・書論・金石・輿地・天文・数学等の広大な領域におよんだ。その編纂・出版物である『皇清經解』(十三經注疏)『経籍纂詁』などは経学上の集大成として知られるほか、山東・

浙江の金石録、広東・雲南の省通志などにおいて地方史料の活用を促進した点でも大きな業績を残した。『清史稿』卷三六四に立伝される。また、張鑑による年譜がある。張鑑撰・黄愛平点校『阮元年譜』（中華書局、一九九五）。

(6) 衡山・前掲注(2) 文徵明の号。祖籍が湖広の衡山にあったことに由来する。

(7) 楊芷・楊芷、字は文植、あるいは次景とも。湖広安陸県の人。嘉靖癸丑の進士。南直隸呉江の県令として、「倭寇」鎮圧に協力。その後も広西や広東に転任して軍事・警察上の治績を重ねたが、隆慶初年には致仕して白兆山人と号し、郷里の名士として後半生を送った。伝記は『松陵文獻』卷一四にみえる。

(8) 高尺有咫、長二丈一尺・小川環樹『新字源・改訂版』（角川書店、一九九四）の度量衡表によれば、明代の尺は三二・一c m。咫は八寸、すなわち二四・八八c m。丈は一〇尺、すなわち三・一一m。これを適用すると、同図巻の大きさは、縦五五・九八c m×横六五三・一c mであったという計算になる。『倭寇図巻』と『抗倭図巻』は、前者が縦三二c m×横五二c m（須田牧子『倭寇図巻』『日本史の研究』二三四、二〇一一）、後者が縦三二c m×横五二c m（『中国国家博物館蔵文物研究叢書・絵巻巻（歴史画）』上海古籍出版社、二〇〇六）とほぼ等しく、張鑑のみた『平倭図巻』のみが一回り大きかったことになる。ただし、『平倭図巻』には題跋が附されていたことや、張鑑が装幀を含めて計測した可能性も考えると、断定はできない。

(9) 『紀事』…本文では後掲注(10) 張鑑の著作とされるが、『張通參集』一卷をはじめ、現存する張鑑の詩文にこれに該当するものはなく、内容は不詳。

(10) 張寶…(二四八六一―一五六二) 明代中期の文人。字は允清、蘇州府崑山県の人。一族は仕官者を多く輩出しており、自身も官途に就いたが、のちに致仕し、その後は書画を楽しむ、山水に逍遙する余生を送ったとされる。著作としては、『張通參集』一卷が伝わる。同郷の帰有光『震川先生集』卷二三に「通政使同右參議張公墓表」がある。

(11) 顧箬谿・顧応祥(二四八三―一五六五)、字は惟賢、箬谿と号した。湖州府長興県の人。弘治一八年の進士。官は山東按察使、雲南巡撫などを歴任、南京刑部尚書に至り、軍事および刑事行政の分野で功績をあげた。王陽明や湛甘泉に傾倒したが、批判精神を失うことなく経験知と実用の学を旨としたと伝えられる。また、算術に深い造詣を示し、『弧矢算術』『測圓海鏡分類釋術』などの著作を残している。伝記に徐中行「顧公行狀」(『国朝猷微録』卷四八)、王世貞「箬谿顧公墓誌銘」(『弇州山人四部稿』卷八六)がある。

(12) 『海寇篇』…前掲注(11) 顧応祥の作とされる。『明詩綜』卷三三に、顧応祥の作として「海寇」と題する詩が収められるが、張鑑の本文にいう「去年嘉興敗」という句は含まれておらず、年月への言及もないため、あるいは別の一首か。顧応祥には『崇雅堂詩集』一四巻があるが、筆者は未確認。

(13) 丙辰乍浦・梁莊之捷…嘉靖三五年(一五五六)に胡宗憲司令下の官軍が徐海麾下の「倭賊」を殲滅した戦役を指す。実際には梁莊では戦闘は行われておらず、『明実録』ならびに『明史』に由来する誤記。正しくは「乍浦・沈莊(沈家莊)之捷」とすべきである。これらの戦役を経て、胡宗憲の陰謀により同士討ちを繰り返した「倭賊」は江南デルタにおける拠点をほぼ完全に失った。乍浦は浙江省平湖県と海塩県の中間に所在し、杭州湾に面した港。清代には日本向けの貿易船の主要な出港地であった。梁莊は乍浦東北方の海岸沿いに位置する戦略上の要地で、後には乍浦巡検司が置かれた。沈家莊については後掲注(21)を参照。戦役の詳細については『籌海圖編』卷九／「乍浦之捷」・「紀勦徐海本末」、采九徳『倭變事略』卷四に詳しい。

(14) 『明史』世宗本紀…『明史』卷一六。

(15) 徐海…(一五五六) 倭寇の頭目の一人。号は明山。はじめ杭州虎跑寺の僧で法名を普浄といった。叔父の徐銓に誘われて日本に渡来し、その借金のかたとして大隅に寄寓する。陳東・麻葉らとともに薩摩・大隅をはじめとする各地の倭人を率いて江南を攻め、王直に次ぐ倭寇の巨頭とみなされた。その後、胡宗憲の勧めに従って官軍への帰順を考え、か

- つての仲間であった陳東・麻葉を捕えるなど官軍への貢献を果たすが、胡宗憲の策略で殺される。李猷璋「嘉靖海寇徐海行蹟考」(『石田博士頌寿記念東洋史論叢』石田博士古希記念事業会、一九六五)を参照。
- (16) 『日本傳』…『明史』卷三三二。
- (17) 東・陳東(？—一五五六)。倭寇の頭目の一人。徐海と行動をともにし、これよりやや格下の関係にあった。しかし、「薩摩王弟故帳下書記督」と称されるように、日本の薩摩の勢力とより強い紐帯をもち、半ば独立した勢力基盤を持っていた。明朝当局には徹底抗戦の方針をとったため帰順の道を探る徐海と対立し、徐海に捕えられて官軍に送致された。徐海の戦死後、麻葉・徐洪・辛五郎らとともに処刑されたと思われる。
- (18) 葉・麻葉(？—一五五六)、葉麻とも称される。麻とは麻子、すなわちあばた面であったことからつけられたあだ名であろう。本名は葉明か。倭寇の頭目の一人。陳東とともに当局に強硬な姿勢を崩さなかったが、徐海によって捕えられ、官府につき出された。葉明は、胡宗憲の指示で陳東にあてて徐海の暗殺を促す手紙を書くが、これは徐海側に漏洩され、徐海が陳東を捕えるきっかけになった。
- (19) 『宗憲傳』…『明史』卷二〇五。
- (20) 洪・徐洪(？—一五五六)、徐海の弟。徐海帰順に先立って人質として官軍側に送られたが、身柄の保護を約束する胡宗憲の言葉を信じ、徐海の投降への道筋をつけた。その後、葉明らとともに処刑された。
- (21) 沈莊・沈家莊とも。現在の浙江省平湖市林埭鎮清溪橋西岸に所在した村莊。同地は現在でも沈姓の住民が多数を占める。当時、周囲は四方を水で囲まれた天然の要害で、また中間の河を隔てて東沈莊と西沈莊に分かれていたとされる。これは現在の地形からも確認できる。
- (22) 辛五郎(？—一五五六) 新五郎とも。「倭寇」の頭目の一人。大隅島主の弟と称される日本人の將。徐海の配下で江南の「倭寇」に加わった。徐海の帰順とともに帰国を望むが、盧鐘の計略にかり捕えられる。その顛末は『籌海圖編』卷九「金塘之捷」に詳しい。その後、麻葉・徐洪らとともに処刑された。
- (23) 貝冑組甲・貝冑は貝殻を嵌めこんだ兜。組甲は組紐で金属片や皮革片を編んだ鑑。
- (24) 豊頤而短鬚・豊頤は下あごががっしりして恰幅のよいさま。富貴や威信を表す面相とされた。鬚は腮に通じほおひげを指す。
- (25) 紫駟馬・たてがみの黒い赤馬。古來名馬とされた。
- (26) 大纛・軍隊あるいは儀仗に用いられた大旗。
- (27) 終葵・棍棒。
- (28) 茅副使坤・茅坤(一五一二—一六〇二)、字は順甫、号は鹿門。浙江帰安の人。嘉靖一七年の進士。のちに致仕し、後半生を文壇の名士として過ごした。秦漢文を尊ぶ七子派に対し、唐宋八大家を文章の規範とする唐宋派の一人に数えられる。胡宗憲の幕僚としても活躍し、その著『紀勦徐海本末』が徐海の最期を描いた記録として知られる。『明史』卷二八七に立伝。朱国禎による墓誌銘(『朱文懿文集』卷九、「國朝獻徵錄」卷八二)や屠隆による行狀(『茅鹿門先生文集』卷三五)がある。
- (29) 『紀勦徐海本末』…『籌海圖編』卷九、『茅鹿門先生文集』卷三〇。
- (30) 永・保兵・湖広の永順・保靖両宣慰使司出身の兵士を併称したもの。その後裔は現代中国では使用言語に従ってチベット・ビルマ系の土家族、ないしはミャオ・ヤオ系の苗族に分類される。戦場では勇猛をもって知られ、しばしば土兵と呼ばれて一般の兵士とは区別された。『籌海圖編』卷一一下によれば、湖広の土兵の中でも永順が第一、保靖がそれに次ぐといわれ、とりわけ鉤・鎌・槍・弩の扱いに長けていたとされる。
- (31) 張納言・前掲注(10)張寶を指す。納言は唐代の官で通政司の雅名。張寶が通政司右參議を務めたことから通称された。
- (32) 績谿・胡宗憲を指す。胡宗憲の出身地が徽州府績谿県であることから。
- (33) 頤雷上微銳・頤雷とは、『礼記』に「頤雷垂拱」「端行頤雷如矢」などの用例があり、頤は下あご、雷は家屋の軒のことで、あごを軒端のように突き出してうやうやく身をかがめることと説明される。上微銳とは上鋭下豊、すなわち頭の先がやや尖った面相を指すものと思われる。
- (34) 彎眉讜目・彎眉は大きく上がった眉。讜目は蜂目に通じ、スズメバチの腹部のような形状の目つき。凶悪な面相のたとえとされる。
- (35) 青驄・青黒と白の体毛の混じった馬。

- (36) 趙文華・(一五五七)字は元質、浙江慈谿の人。嘉靖八年の進士。官は工部尚書に至る。嘉靖三十四年、督察軍務の特命を帯びて対「倭寇」戦役を視察し、総督軍務張経と浙江巡撫李天寵を弾劾し、死罪に追い込む。敵嵩を父と仰ぎ、胡宗憲とともに「倭寇」鎮圧に携わったが、その党派性を後世まで批判され、伝統的な歴史観ではこの時代を代表する姦臣とみなされる。『明史』卷三〇八／姦臣伝に立伝。
- (37) 『文華傳』・『明史』卷三〇八。
- (38) 督察軍務關防・督察軍務とは勅命によって工部尚書・趙文華が受けた任務で、それまで前例のない特設の職位。関防とは官印のことで、趙文華のため特別に鑄造された。『明世宗實錄』卷四二三／嘉靖三十四年六月壬午の条に記録される。
- (39) 『宗憲傳』・『明史』卷二〇五。
- (40) 張経・(一五五五)蔡経とも。字は廷彝、号は半洲。福建侯官の人。正徳十二年の進士。広東・広西で長く任官経験を積み、両広総督に至る。士兵の扱いに心得があったことから、倭寇対策のため江南・江北・浙江・山東・福建・湖廣の六省の諸軍を統轄する総督軍務に任ぜられる。敵嵩・趙文華と相容れず、浙江巡撫李天寵とともに作戦の遅滞を弾劾され、下獄して北京で処刑される。隆慶初年に名譽回復し、襄敏と諡される。『明史』卷二〇五に立伝。
- (41) 李天寵・(一五五五)字は子承、河南孟津の人。嘉靖十七年の進士。倭寇鎮圧の命を帯びて浙江巡撫に任ぜられるが、張経と同じく趙文華に弾劾され、処刑される。『明史』卷二〇五に立伝。
- (42) 豊下而須・豊下とは前掲注(24)豊頤と同じく、豊かで恰幅のよい下あご。須はあごひげ。
- (43) 阮鶚・(一五〇九―一五六七)字は應薦、号は函峰。南直隸桐城の人。嘉靖二三年の進士。趙文華と結んで浙江巡撫に任ぜられる。当初は胡宗憲の盟友だったが、やがて関係は悪化。その後、福建巡撫を務めるが、海賊の懐柔資金捻出のため重税を課し、胡宗憲失脚と同時期に背任行為の嫌疑がかけられる。隆慶初年に名譽回復するが、まもなく死去する。『明史』卷二〇五に立伝。『国朝獻徵録』卷六三に「右僉都御史函峰阮公鶚墓志銘」がある。
- (44) 『浙江倭變紀』・『籌海圖編』卷五／「浙江倭變紀」／嘉靖三五年八月。
- (45) 『獻徵録』・『国朝獻徵録』卷六三／「右僉都御史函峰阮公鶚墓志銘」。
- (46) 趙孔昭・字は子潜、号は玉泉。北直隸邢台の人。嘉靖二三年の進士。浙江巡按御史として、趙文華の敗戦を弾劾。官は兵部侍郎に至る。伝記に王世貞「弇州四部稿・續稿」卷七七／「少司馬趙公傳」がある。
- (47) 『倭變紀』・『籌海圖編』卷五／「浙江倭變紀」／嘉靖三五年八月。
- (48) 平湖・浙江嘉興府所轄の県名。宣徳五年に海塩県の東北部が独立することで成立。東境を南直隸松江府に接し、南は杭州湾に面する。乍浦周辺の小山地を除く大部分が広大な沖積平野によって占められる。天啓・乾隆・光緒の県志が知られる。
- (49) 郭仁・字は子静。嘉靖二六年の進士。官は兵部郎中に至る。趙文華に取り立てられ、胡宗憲とも協力関係にあったが、二人が公金横領の嫌疑で弾劾をうけると、革職され身分を剥奪される。
- (50) 劉燾・天津衛の人。嘉靖一七年の進士。官は右都御史に至る。『国朝列卿記』卷一一六に伝あり。
- (51) 徐汝・『籌海圖編』卷九／乍浦之捷には、「副使徐洛」の名が見える。張鑑の誤記か刊本の誤植であろう。徐洛は河南許州の人。『皇明貢挙考』卷七によれば、嘉靖二三年の第三甲。万曆『湖州府志』卷九によれば、嘉靖三二年に湖州知府に任じ、三五年に山東按察司副使に昇任している。
- (52) 汪柏・字は廷節。江西浮梁の人。嘉靖一七年の進士。広東海道副使在任時にポルトガルとの交易を許可したことで知られる。張廷茂「從汪柏與索薩議和看早期中葡關係的轉變」(『安徽史學』二〇〇七―一)を参照。著作に『青峰先生存稿』八卷がある。
- (53) 王詢・字は可庸。四川成都の人。嘉靖甲辰の進士。官は右僉都御史に至る。三八年に病を理由に致仕。
- (54) 諸大圭・諸大圭・(一五三四―?)餘姚の人。字は信夫、号は曙海。嘉靖三一年の挙人。『籌海圖編』卷九所収の「乍浦之捷」の執筆者である。万曆五年に進士に及第し、官は工部主事に至る。『明三元考』卷一一に略伝あり。

- (55) 『乍浦紀捷』…『籌海圖編』卷九／「乍浦之捷」を指す。
- (56) 徐珏…字は汝和。年少時は北直隸涿州に寄寓していたが、正確な出身地は不明。嘉靖二年の武進士。寧夏・大同等で武功を重ね、紫荆・保定など各地の鎮守総兵を務める。嘉靖三五年に「倭寇」平定戦に加わる。この時の戦功により、子孫はながく恩典にあずかったという。『本朝分省人物考』巻二に伝あり。
- (57) 戴冲霄…明代中期の武官。『明世宗實錄』卷四〇一／嘉靖三十二年八月己亥には(福建) 総督備倭指揮の肩書きで現れ、四庫本乾隆『福建通志』卷一三は遼陽人とする。ただし、万曆『雷州府志』卷一三は浙江紹興の人とする。『籌海圖編』には都指揮使としてしばしば名が見える。国博本『抗倭図巻』には張鑑の叙述に対応する図像はみえず、『平倭図巻』と異なる点の一つである。
- (58) 『倭變紀』…『籌海圖編』卷五／「浙江倭變紀」／嘉靖三十五年八月。
- (59) 尹秉衡…(一五三四—一六〇一)、山東齊河の人。胡宗憲が宣大御史を務めた際に器量を見いだされた。後には保定総兵等を務める。
- (60) 『捷紀』…『籌海圖編』卷九／「乍浦之捷」を指す。
- (61) 通眉…左右の眉がつながっていること。
- (62) 反接…後ろ手に縛りあげること。
- (63) 盧鐘…河南汝寧衛の人。福建都指揮僉事として双嶼攻撃などに従事。一時死刑判決を受けて下獄する。その後再起用され、胡宗憲のもとで辛五郎の逮捕など数々の功績をあげる。胡宗憲の失脚にともなって弾劾を受けるが、赦されて故郷に帰る。『明史』卷二二二に立伝。
- (64) 佛郎機…ポルトガル伝来の大砲。この時代の火器に関しては、『籌海圖編』卷一三下／「仏郎機図説」、久芳崇『東アジアの兵器革命—十六世紀中国に渡った日本の鉄砲』(吉川弘文館、二〇一〇)、中島榮章『銃筒から仏郎機銃へ…十四～十六世紀の東アジア海域と火器』(『史淵』一四八、二〇一一)を参照。
- (65) 俞大猷…(一五〇三—一五七九)字は志輔、号は虚江。福建晋江衛の世襲百戸の出身。嘉靖十四年の武進士。官は後軍都督僉事に至る。主に広東から浙江までの東南沿海地方の武官要職を歴任して数々の武功を挙げ、後世からも稀代の名将と称えられる。諡は武襄。文集に『正氣堂集』がある。『明史』卷二二二に立伝。
- (66) 『倭變記』…以下の文は『籌海圖編』卷五／「浙江倭變記」ではなく、同卷九／「乍浦之捷」「紀勦徐海本末」に見える。
- (67) 丁僅…明代中期の武官。『明世宗實錄』卷四三三／嘉靖三十五年三月乙丑に、胡宗憲の推薦で海寧把総指揮から參將に昇任した記事が見える。
- (68) 翠翹…徐海の愛妾。姓は王。山東臨淄の出身と伝えられる。音曲に非凡な才能を発揮し、江南の花柳界でも特に知られた妓女であった。徐海の寵愛を受けるが、胡宗憲の意を受けて徐海に官軍への帰順を勧める役割を果たす。徐海の死後、錢塘江に身を投げたと伝えられる。その生平は『金雲翹傳』をはじめとする複数の古典小説の題材となった。万曆五年初刻の徐学謨『徐氏海隅集』卷一五所収「王翹兒傳」が最も早くに成立した伝記とされる。陳益源『王翠翹故事研究』(西苑出版社、二〇〇三)を参照。
- (69) 綠姝…前掲注(68) 翠翹と同様王姓で、徐海の愛妾。翠翹のような伝奇的故事は伝わらない。
- (70) 河朔…黄河以北の地域。江南の対義語。
- (71) 永・保…前掲注(30)で述べたように、永保とは永順県と保靖県の併称である。直後に「日保靖」と続くので、これは永順の誤記か、あるいは張鑑が「永保」を単独の県と誤解したものであろう。
- (72) 容美…湖広容美宣撫司。
- (73) 張伯儀…唐代魏州の人。もと契丹系軍閥李光弼の配下にあった。袁晁を捕えた功によって睦州刺史を授かり、やがて江陵節度使に進んだ。死後、揚州大都督を追贈され、恭と諡される。『新唐書』卷一三五に立伝。
- (74) 袁晁…(？—七六四)もと台州の胥吏。唐代宗の宝応元年(七六二)に浙東で反乱を起こし、二十万の衆を擁して宝勝の年号を建てたが、翌広徳元年、張伯儀に生け捕りにされ、さらに翌年長安で斬首された。
- (75) 王氏…唐代揚州の人。祖籍は太原で、一族は高位の任官者を多数輩出した名門。裘甫の反乱が起こると、浙東觀察使として討伐に従事。その本末を記した『平剌録』一卷が『新唐書』卷五八／藝文志に見える。『舊

唐書』卷一六四、『新唐書』卷一六七に立伝。

(76) 裴甫…(一八六〇) 仇甫とも。剡県の出身で、もとは私塩の密売に携わる。大中一三年(八五九)に象山県を攻略して反乱をおこし、浙東一帯に勢力を築くが、翌咸通元年、王式に生け捕られて長安で斬首された。

(77) 胡三省…(一一三〇—一一三〇二)、字は身之、台州寧海の人。南宋宝祐年間の進士。宋末から『資治通鑑』の研究に着手し、元代至元年間について『音注』二九四卷、および『釋文辨語』一二卷を完成した。件の一文は、咸通元年七月の条にみえる。

(78) 王江涇之捷…総督軍務張絳と浙江巡撫李天寵のもと、紹興府と嘉興府の中間にある王江涇で行われた戦役。官軍側の初めての大勝利に終わった。『籌海圖編』卷九にその顛末を記した「王江涇之捷」がある。

(79) 『明史』及『武備志』…『明史』卷二〇五／胡宗憲傳、同卷三〇八／趙文華傳、『武備志』卷二三〇／「日本考」などに趙文華が讒言により張絳を陥れた記述が見える。

(80) 「去年嘉興敗」…顧応祥の「海寇篇」の句だというのが、『明詩綜』卷三三の「海寇」には見えないため、詳細は不明。

【日本語訳】

明の文徴明が画いた『胡梅林平倭図巻』は、揚州阮氏文選樓の所蔵である。雲台先生がおっしゃることには、「この巻物の筆蹟は衡山のものとは思えない。しかもこのころ衡山はすでに八十七歳だ。その「門下文徴明」と自署してあるのは、あるいは兵部主事楊芷が衡山の門弟に頼んだことで、梅林のものとめに応じたものではないだろうか。君、私のかわりにこれについて考えてみてくれ。」

私が見るところ、この巻物は縦が一尺八寸、長さが二丈一尺ある。巻首に「靖海奇功」の四字を記し、画尾に『紀事』一篇を記す。みな御史張寔の手になるものである。その中に長興の顧箬谿が書いた『海寇篇』もある。詩および『紀事』所載の年月を考えると、おそらくは丙辰の乍

浦・梁莊の勝利を記したものであろう。

『明史・世宗本紀』を見ると、「嘉靖三十五年七月辛巳、胡宗憲、倭を乍浦に破る。」「八月辛亥、また海賊徐海を梁莊に襲って破る。」とある。『日本傳』にいうところの、「宗憲は計略を設けてこれを離間させ、海はついに東と葉を捕えて帰順し、その残党をことごとく乍浦で殲滅した。ほどなくして、また海を梁莊においやり、海もまた討ちとられた。その残党はことごとく滅ぼされ、江南・浙西の諸寇はおおむね平定された。」という、この話が(『世宗本紀』にいう)その事件だが、当時の文士が誇張して大勝利のようにならしたのである。

また『宗憲傳』をみると、「海は桐郷の囲みを解き、ふたたび乍浦をすみかとした。宗憲は兪大猷に命じて奇襲によってその船を焼き払わせた。海は心に怖れを懐き、弟の洪を人質として差し出してきた。宗憲は洪を厚遇することで、海に陳東と麻葉を捕えるよう説きふくめ、子々孫々に及ぶ官爵を与える約束をした。海は果して葉を捕えて献じた。宗憲は葉のいましめを解き、海を殺すよう東をけしかける手紙を書かせた。しかし裏ではその手紙を海に漏らしていた。海は怒り、計略によって東を捕えて献じ、その一党五百人を率い乍浦を去り、別に梁莊に陣を構えた。官軍は(徐海が去った)乍浦の陣営に火をかけ、三百餘の首級を挙げ、焼死者および溺死者も同様の数にのぼった。海はついに日を決めて降伏を願ひ出た。宗憲はこれを慰撫し、海は自ら沈莊を扱ひその一党を駐屯させた。沈莊は東西に分かれており、河がその境界となっていた。宗憲は海を東莊に居住させ、西莊には東の一党を置いた。そして東に命じてその一党に宛てて、「督府は海に指示して、今晚にもなんじら捕えさせようとしている」と手紙を書かせた。東の一党はおそれ、夜陰に乗じて海を攻めようとした。海は二人の妾をつれて裏口から逃げたが、刀傷を負った。翌日、官軍がこれを包圍し、海は水に身を投げて死

んだ。たまたま盧鏜もまた辛五郎を捕えて帰還した。ついに洪、東、葉、辛を捕虜として、海的首とともに京師に献じた。帝は大いに悦び、宗廟に告礼を行った。宗憲は右都御史に昇進した。」とある。これが図中の情景を梁莊と沈莊の両莊とする根拠である。

さて、図中の一人をみると、螺鈿の兜に組鎧を身につけ、恰幅のよい下あごにひげを短く刈り、手綱に手をおいて赤茶色の馬に乗っている。一人の武士が軍旗を掲げて先駆けを務め、やや遅れて二人の武士が、一人は棍棒をもち、一人はまさかりを手にしている。これが総督胡宗憲である。茅坤の『紀勳徐海本末』をみると、「翌日、官兵が四方から包圍し、壁のように密集して進攻した。保靖の兵が先んじて攻撃をしかけたが、ひとまず退き、河朔の兵がこれに乗じて攻撃に加わったが、やはり退却した。すると胡公が甲冑をまとい、音声を張りあげて永・保の兵を叱咤し、左右に列を組んで関の声をあげて突入した。海は追いつめられ、ついに河に沈んで死んだ。」とある。記すところの「甲冑をまとう」との事実は、張納言の記述にも符合するので、これによって續谿であることがわかるのである。

續谿の右の一人の官人は、朱色の官服に絹の冠をつけ、あごが突き出て頭の先がやや尖り、眉が高く上がりぎよろりとした目つきをして、青馬に乗って並走している。これが、尚書趙文華であろうか。『文華傳』をみると、「帝は文華を賢者と考え、命を發して督察軍務の官印を鑄造し、軍中においてこれを下賜したため、それ以降は総督の上位に立つことになった。」とある。また『宗憲傳』に、「海は既に期日を決めて降伏を願ひ出たが、期日に先んじて突然やつてきて、酋長百餘を率いて甲冑を着けたまま入城した。文華らは懼れ、これを拒絶しようとした。」とある。つまり当時、文華はもとより軍中にあつた。それに、文華は張經と李天寵を失脚させたばかりか、宗憲もまた文華の推薦で彼らに代わる

地位についたので、(胡宗憲は)ひたすら粗相のないように気をつかっていた。並走して進むのもまた当然のことだろう。

またその後ろ、高い冠と丸首の襟、刺繍の入った朱色の官服を身につけ、恰幅のよい下あごに鬚を生やした人物は、順序からいって巡撫阮鶚である。『浙江倭変紀』に、「海は期日に先んじて至り、入城して胡・趙・阮の三公にまみえた。」とある。胡は梅林、趙は甬江、ならば順序からいって当然鶚とすべきだろう。かつ『猷徵録』の鶚についての記載に、「桐郷が囲まれてから、賊は奔つて沈莊に拠点をおき、要害にたてこもつて守りを固めた。鶚は、「海を減さないばかりか、さらにその根や蔓を留めようとするのか。」といった。」とある。したがって海を減ぼした際に、鶚は軍中にあつたはずである。

またその後ろに一官人で、がっしりした四角い顔で(向かって)左に振り返っているやや年若い者が巡按御史の趙孔昭である。『倭変紀』には、「海は平湖県城に入り、胡・趙・阮三公、および巡按趙公孔昭に謁見した。県城を出ると、「諸軍門の表情からすると、いずれお裁きは免れまい」と言った。」とある。したがって趙はまたその次である。

そのほかの四人の文官は、みな朱色の服に黒い冠をかぶっており、あるいは郎中郭仁・副使劉燾・徐汝・參政汪柏・參議王詢などかもしれない。いずれも餘姚の諸大圭による『乍浦紀捷』に見えるが、すべてを明らかにすることはできない。

以上が図中の文臣のうち考証が可能なものである。

さて、武臣のうち考証可能なものについては、一人の将官が、顔面はがっしりして鬚はなく、兜をして組鎧をまとうっており、前に二竿の軍旗を擁し、旁らには大旗一竿を掲げ、その上には翼のある虎が画かれており、胡・趙兩人の後についている。これはおそらく総兵徐珏である。これもまた『乍浦紀捷』にみえる人物である。

また一人の将官が前方にいて側面から画かれており、たてがみの黒い茶色の馬に乗り、兜をかぶって赤い鎧をまとい、長旗をとって戦いを指揮している。前方に五人の兵士が矢をつがえて弓を引きしほり、さらに八人の兵士が長鎗をとって前方に撃ちかかっている。これは都指揮戴沖霄である。『倭変紀』をみると、「この時、賊の備えたいへん堅固で、諸将は矢と投石をおそれて近づくことができなかった。胡公は怒り、都指揮戴沖霄に命じてこれを攻めさせると、兵は大進撃して半日の間に賊の巢窟に攻め入った。実に沖霄の功績である。」とある。したがって戴であることは疑いない。

また一人の将官が、右をみて船中に坐し、前に一兵卒が旗を持って立ち、この将官は右手で船の舳先に首級が累々と積まれているの指さしている。これは、あるいは遊撃尹秉衡らであろう。『宗憲傳』をみると、「海の首を京師に献じた。」とあり、諸大圭『捷紀』には、「公は先ず副使劉燾に命じて、遊撃尹秉衡を率い、夜陰にまぎれて乍浦城中に伏兵として待機させた。」と称される。あるいはこの人物であろう。

尹の左に一隻の船がやや後れて続くが、その上に一人の将官が朱色の服に緩い帯を着け、捕虜を献じてきているのがみえる。眉がつながって恰幅のよい下あごを持ち、膝に手をおいて舳先を凝視しており、後ろ手に縛られた捕虜が四人いる。これが総兵盧鏜である。『宗憲伝』をみると、「ちょうど盧鏜が辛五郎を捕えて帰還した。辛五郎とは大隅島主の弟である。」とある。したがって、船にとらわれているのは辛五郎である。

また二つの船が倭船の間に横ざまに乗りつけており、十人あまりが倭と激戦を繰り広げている。一隻の船の舳先には仏郎機砲が置かれ、一人の兵士が身をかがめ、導火線に火をつけて発射しようとしている。後ろの一人の将官は、顔はがっしりと四角く額は広く、腰には弓を提げ、左

手には旗を持ち、右手で戦闘を指揮している。これは総兵俞大猷である。『倭変記』に、「公また別に総兵俞大猷を派遣し、飛艦を海上に潜伏させ、これを遮断して迎撃し、溺れさせてほばあますところなかった。」というのがこれである。

一隻の船がやや先を行き、この船と並んでいる。後ろで一人の将軍が薄いひげを生やして目を怒らせ、黄色い旗をもって戦闘を指揮している。これはひよつとすると参将の丁僅で、乍浦の県城にたてこもって城内から援護にまわった者かもしれないが、完全な考証はできない。

以上が図中の武官のうち考証が可能なものである。

さて、後ろ手に縛られて歩き、身を縄で縛られて捕虜となっている者が三人いる。徐洪、すなわち徐海の弟であり、陳東、すなわち徐海の書記であり、麻葉、すなわち徐海の一味である。

また一隻の小さな鹿頭船があり、船首では二人が竿をもち、一人の鬚を結った子供が籐の覆いの上に立って後方を眺めている。その船は黒い籐の覆いと飾り窓をもっており、窓には一人の女が赤い袖をつけ、鬚を結び、じつと外を眺めている。一人の女性が青い着物と赤い袴をつけ、そこに寄りかかって立っている。一般の民が避難するものとも見えない。あるいは妓女の翠翹と緑妹であろうか。

『紀勦本末』をみると、「海はあわてふためいて、酋長に命じて密かに侍女二人を脱出させた。」(徐海の)死に及んで、「永・保兵、侍女二人を捕えて前進し、海の所在を訊ねた。侍女二人は姓を王といい、一人は名を翠翹、一人は名を緑妹といった。もともと歌妓であった。二人の侍女は泣いて海が入水した地点を指した。永・保兵はとうとう河に踏み入り、海的首級を斬りとって帰還した。」つまりこれがその人であろう。そのほかの兵士は、河朔・永保・保靖・容美などの土兵がおり、よって一律ではない。

ああ、絵を画くことかくも精確で当時の情況に合するのは、並大抵のことではない。むかし唐の時代に浙東ではたびたび凶悪な盜賊が起こったが、張伯儀が袁晁を平定したことは、王式が裘甫を平定したほどに（顕彰が）およばない。胡三省は通鑑に注して、これは「唐の中葉以降、それぞれの家が私史をもつようになり、王式は読書人であったので、勲功を挙げると、事績を記録してはことごとく誇張してに伝えたからだ」という。今にして梅林の業績をみても、またどうしてこればかりが例外でありえよう。そして、王江涇の勝利は実際には張經によるものだが、その功績は文華に奪われてしまった。『明史』および『武備志』をふたたび読んでみるがよい。かたや箬谿の詩はあからさまに「去年嘉興敗」をいうが、（胡宗憲を）揶揄する含みは明らかではないか。以上を記とする。

本研究集会は、科学研究費補助金基盤研究A「ロシア・中国を中心とする在外日本関係史料の調査・分析と研究資源化の研究」（課題番号23212039、研究代表者・保谷徹）の一環として、その経費の一部も使用して行なった。